

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	王 穎
2. 審査委員	主査：（上越教育大学教授） 我 妻 敏 博 副主査：（上越教育大学教授） 河 合 康 委員：（上越教育大学教授） 加 藤 哲 文 委員：（兵庫教育大学教授） 鳥 越 隆 士 委員：（岡山大学教授） 大 竹 喜 久
3. 論文題目	中国における聴覚障害幼児の名詞の習得状況及び指導方法に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 王 穎 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年2月17日（金）14時間30分～15時00分          場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 2階 演習室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>序論</p> <p>第1章 中国における聴覚障害児教育の現状と課題</p> <p>中国における聴覚障害児教育についての政策の変遷、教育形態、聴覚障害幼児教育に関する研究の動向から中国の聴覚障害児教育の現状と課題を明らかにした。</p> <p>第2章 聴覚障害幼児に対する言語指導</p> <p>聴覚障害幼児に対する言語指導について、聴覚障害児の語彙の問題、聴覚障害幼児の語彙指導、言語指導の現状を述べた。先行研究から聴覚障害児の語彙の特徴および問題点が明らかになり、聴覚障害幼児の語彙指導における名詞の重要性および幼児の発達に合わせた指導方法の重要性が示唆された。</p> <p>第3章 問題と目的</p> <p>序論第1章、第2章で述べた先行研究をまとめ、聴覚障害幼児の名詞獲得を促すための指導方法を検討する必要性を述べたうえで、本博士論文における研究の目的を以下のように設定した。①日本と中国における聴覚障害幼児の教育機関で実際に指導している名詞について調査し、指導する名詞の数と種類を分析する。②日本と中国において聴覚障害幼児に名詞を指導する際に使用されている指導方法について調査し、その指導方法が聴覚障害幼児の年齢によってどのように変化するかを分析する。③中国において聴覚障害幼児が習得している名詞について調査し、習得した名詞の数や種類が、年齢が上がるにつれてどのように変化するか、名詞の種類と指導方法の間にどのような関係があるかを明らかにする。④中国で名詞指導の実践を行い、名詞獲得を促すための指導方法を検討する。</p>

## 本論

### 第1章 中国における聴覚障害幼児に指導する名詞

中国における聴覚障害幼児の教育機関8ヶ所51名の教員を対象に、実際に指導している名詞および名詞の種類について調査した。その結果、①51名中半数以上の教員が実際に指導している名詞441語を抽出し、具象語11種類(360語)と抽象語4種類(81語)の15種類に分類した。②調査した1,288語のうち、51名の教員全員が共通して指導している名詞はわずか84語、75%以上の教員が指導している高頻度名詞は188語、50%以上の教員が指導している名詞は441語であり、8機関51名の教員が共通に指導している語彙は少ないことが明らかになった。次に日本の聾学校幼稚部3校から収集した語彙表などの資料から、指導する名詞について分析し、3校共通に指導する名詞659語を抽出した。

### 第2章 中国における聴覚障害幼児の名詞の習得状況

本論第1章で得られた441語の名詞に焦点を当て、中国の聴覚障害幼児の教育機関に在籍する聴覚障害幼児94名を調査対象とし、聴覚障害幼児の担当教員36名を調査回答者として質問紙調査を行った。その結果、①各年齢の平均理解語数および平均表出語数から、年齢が上がるにつれて指導語彙の獲得が進んでいる様子が見えてきた。②調査の対象とした名詞441語を15種類に分類して分析した結果、「施設・場所」「創作・学習」は4歳になって増加し、「食料・薬品」「動物」「乗り物」は5歳になって増加するなど、年齢が上がるにつれて語彙獲得に質的にも変化のあることが示された。③調査した名詞441語は具象名詞360語、抽象名詞81語であり、指導されている抽象名詞が少ないことがわかった。

### 第3章 中国における聴覚障害幼児に対する名詞の指導方法

中国の聴覚障害幼児の教育機関8ヶ所51名の教員を対象に、本論第1章で得られた名詞441語を指導する際、どのような方法で指導しているのかを調査した。その結果、①指導方法については「絵・写真法」と「実物法」が名詞の全ての種類において最もよく使われていること、②「動作法」「比較法」「役割法」はあまり使われていなかったが、名詞の種類に応じてそれぞれの指導方法の特徴を活かした語彙指導が行われていることが示唆された。

### 第4章 日本における聴覚障害幼児に対する名詞の指導方法

日本全国の聾学校幼稚部82校を対象に、本論第1章で得られた名詞659語がどのような方法で指導されているかを調査し、その指導方法が聴覚障害幼児の年齢によってどのように変化するかを分析した。その結果、①各年齢とも頻繁に使われている指導方法は「絵カード・写真法」と「実物法」であり、「比較法」と「役割法」はあまり使われていないこと、②「実物法」は子どもの年齢が上がるにつれて減少する傾向が見られ、「比較法」と「役割法」は増加傾向が見られることがわかった。

### 第5章 中国における聴覚障害幼児に対する名詞の指導の実践

中国における聴覚障害幼児の教育機関4ヶ所の幼児72名を対象に、その72名を2群に分け、本論第3章と第4章で得られた中国と日本の指導方法で名詞指導を実践した。その結果、①両群とも事前テストより事後テストの成績が高くなり、両群の指導方法とも効果があった、②3歳児に対しては両群とも「絵・写真法」と「実物法」の指導効果が高かった。

## 結論

本研究の研究内容、方法、結果を概括し、結論としてまとめた。また、本研究の課題や限界について述べた。

## 2. 審査経過

### (1) 研究目的と論文構成の整合性について

本研究は中国における聴覚障害幼児の名詞の指導に焦点を当て、指導されている名詞およびその指導方法について実態を調査し、名詞の種類とそれに対応する指導方法を明らかにすることで、聴覚障害幼児の名詞の獲得を促すための効果的な語彙指導のあり方を検討することを研究の目的としている。本研究ではまずあまり明確でなかった中国の聴覚障害児教育の変遷と現状について中国の政策を軸に明らかにした。その現状を踏まえた上で、中国の聴覚障害幼児教育機関を対象に名詞の語彙指導に関する各種の調査を実施し、実態を明らかにした。その中で中国における聴覚障害幼児の名詞の習得状況、名詞の指導方法の実態を日本の場合と比較しながら明らかにした。さらに、調査の結果得られた指導方法の効果を実際の指導実践から検証した。調査方法や結果の分析方法は適切であり、考察も妥当であると認められた。以上のことから、研究目的と論文構成に十分な整合性があると判断された。

### (2) 学位論文としての独創性と発展性について

聴覚障害幼児に対する語彙指導はどの教育現場においても日常的に実践されている。しかしそれは経験をもとにした実践であり、基準となる指導語彙リストや推奨される指導方法があるわけではないので、どのような語彙をどのような方法で指導すればよいかの目安となる具体的な基準の明確化が教育現場から求められている。本研究は「名詞」に焦点を当てた調査を複数種類実施し、分析結果から基準となるような指導語彙、指導方法、対応する年齢について明らかにした点で研究の独創性があるといえよう。そして調査で得られた結果が果たして実践と結びつくかについて実際に指導を実践し検証している点がこの研究の特色である。この研究は名詞に焦点を当てているが、さらに動詞、形容詞、さらには文法指導へと研究対象を拡大することで今後の発展が期待できる研究である。

### (3) 学校教育の実践への貢献について

聴覚障害幼児の教育を行っている教育機関で、どの名詞を教えているのか、どのようにして教えているのかを調査結果をもとに明らかにしたことで、本研究は聾学校をはじめ、聴覚障害幼児を対象としている中国の教育機関における語彙指導に具体的な指針を与えるものであり、教育現場における実践に対して非常に大きく貢献する研究である。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 王 穎 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。